

園長室の窓から

母の日、父の日プレゼント

市原 豊子

日々の保育の中で子どもたちが生き生きと活動し、ひとりひとりが充実して生活できるようにと努力している先生でも、行事の事となると、特に製作面では、教師が一方的に活動を与えて、毎年同じような製作が繰り返されることになりやすい。行事製作、とりわけプレゼント製作を子どもの側に立って考えなおしてみたい。

四月に入園したり進級した子どもたちにとって母の日や父の日は思いのほか早くやってくる。園生活

にまだ十分なれず、はさみやのりやテープの扱いすらむづかしい時である。教師はひとりひとりの子どもとのつながりをつくり、個人に合わせてけんめいに保育をしている時期でもある。そんな時に母の日はやってくる。母の日や父の日の期に、おとうさんやおかあさんの仕事や自分とのつながりを考えることは決して悪いことではない。問題はこれらの扱い、とりわけプレゼント製作にある。

☆ ☆ ☆

おかあさんの絵、というのはどんなに拙い絵でも、母親にとってはうれいものである。けれども誰にもみんなに描かせる課題画となると問題がある。どんなに素朴でも天真爛漫に描ける子どもにはよいが、白い画用紙を前に涙ぐむ子や、「先生ほくこれうちで描いてくるよ」「むずかしくてかけないヨ」という子どもが二人や三人は出てくる。母の日さえなければいいのに、と子どもに思わせるような課題では何のためのプレゼントか意味を失う。しかし現実に、おかあさんの日のために難渋し、困り切っている子どもはどの園にも何人かいるのではないだろうか。

☆ ☆ ☆

教材会社のカタログには、不織布のエプロンや、ルーブタイどめなどがある。一見使えそうで実は決

して実用にはならない。大人はプレゼントに実用品をと考えるが、子どもが作るものだから、非実用的なものにならざるをえない。子どもが作るプレゼントは実用性など考えず、子どものレベルに立返って考え直す方がよいのではないか。

☆ ☆ ☆

六月のある年長組の学年会議で父の日のプレゼントが議題に上った。「昨年は何だったかしら」「紙粘土の筆立てよ」「今月の雑誌〇〇にいいのあったわよ」「どれどれ」こんな会話を聞きながら私は疑問を感じずにいられなかった。いったい父の日や母の日のプレゼントというのは教師が必死になって考えたり、保育雑誌をペラペラめくってまるでお中元の商品カタログから物を決めるようにして決めて、一律一方的に課題活動として作らせるものだろうか。ついに「先生方、子どもたちは父の日に何をしたいのか、何を作ってプレゼントしたいのかまです

聞いてみてはいかが？」と声をかけた。せっかく書類ばさみを作ることに決まってほっとしたところに園長の思わぬ提案に「考えてみます」とその場は終わった。

M先生はクラスに持帰って、お父さんについて話し合ったあと、各自自分のお父さんにプレゼントしたいものを考え、材料を集めることにした。その頃クラスの活動になっていたデパートごっこに「お父さん売場」が設けられた。紙粘土や空カンのコーナー、空箱、空容器のコーナー、絵を描いたりカードを作るコーナー、を作りそれぞれが自分のお父さんにふさわしいものを工夫して作ることになった。できたものは一人一人異なるが、灰皿、めがね入れ、鍵入れ、おとうさんの絵、ダイヤモンド、うさぎの置物、中には「せき入れ」（せきが出る時手でおさえるかわりに空パックに割ばしをつけたものを使う）などというものも出て、バラエティーに富んだ

その子なりのプレゼントができた。

あてがいぶちの活動でないためにかえって意欲的にとり組み、二つ三つ作ったり、カードなども自動的にそえられた。子どもが自分でよく考え、自分のお父さんのためにプレゼントを作るのは、それぞれのイメージを大切にすることである。結果は子どもも満足し、お父さんにも大いに喜ばれることになる。

